

範は紀州史にあり

<135>

わかやま教育今昔

来年創立100周年を迎える近畿大学で、筆者は特別研究員を兼務している。そのため、近大所属の優れた研究者諸氏との接点が増えた。先週初めてお目にかかった富岡勝教授も、その一人だ。

近大の東大阪キャンパスで研究室を構える富岡教授の専門は日本教育史で、旧制高校や旧制中学の実態史に詳しい方だ。大学アーカイブズ研究でも知られる教授は、日本最古の現役学生寮である京都大学「吉田寮」を活かすための諸活動に熱心であり、その豊かな見識に魅せられる。

筆者は富岡研究室で

コーヒーを飲みながらこう質問した。「近大創設者の世耕弘一は、ドイツ留学中に紀伊徳川家や、和歌山出身で農林大臣などを歴任した岡崎邦輔から支援を受けたことで知られる。その支援内容は、解明されているのでしょうか」と。

近大の建学史料室研究員を兼担する富岡先生は、「そのあたりの事は荒木康彦・近大名誉教授がある程度つかんでおられると思う。しかし支援内容の全貌解明となると、これからの研究課題ではないか」と。

この富岡教授の示唆を受け、紀伊徳川家第

第十五代当主徳川頼倫の誕生

富岡勝・近大教授の示唆



近大通り—東大阪市の近鉄大阪線「長瀬」駅前

熱を傾けた先人だ。彼の実績の一端は、筆者が編さん委員として関与した「和歌山県教育史」全3巻（県教育委員会）で明示した通りである。

頼倫時代における紀伊徳川家独自の育英事業の中で、弘一支援がどう位置づけられるのか。更に、若い頃に「警察界に身を投じ、新宮署長にまで昇進」（「郷土歴史人物事典 和歌山」第一法規）した後、政界に転身したという岡崎邦輔、陸奥宗光の従兄弟に当たる岡崎と、「新宮」に地縁を持つ世耕家のつながりをひもとくことも重要であろう。こうした問題意識を、富岡研究室訪問を経て再認識した

第十五代当主である徳川頼倫（1872〜1925年）の実績を想起

した。頼倫は、文化財保護や若者に対する教育支援などに大きな情

訪問を経て再認識した

次第。さて、頼倫のことをもう少し語ろう。幕末維新という激動期を最後の紀州藩主、すなわち紀伊徳川家第十四代当主として活動した徳川茂承（1844〜1906年）には、長福丸という男子がいたが早世。そこで、紀伊家が後継者として白羽の矢を立てたのが、御三卿の一つである田安德川家六男の藤之助だ。藤之助は8歳になる年に、茂承の養嗣子となる。これを機に名を改め、徳川頼倫となった。

― 続く

首野洋（四天王寺大学教授・慶応義塾大学客員研究員）

次回8月23日掲載予定